

Title	<傍観者>の系譜
Author(s)	出原, 隆俊
Citation	語文. 2012, 98, p. 27-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69194
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈傍観者〉の系譜

一

一九七二年元日から、翌年三月末にかけて、テレビ映画「木枯らし紋次郎」が放映された。上条恒彦が歌ったウェスタン調の主題歌、型に乗っ取らない刀の振り回し、肉体を切る音の擬音、縦横無尽のカメラワーク、そして何よりも「あっしには関わりのないことでござんす」として、助けを求める弱者に背を向けることが、既成の時代劇とは大きく異なり、一気に人気を博して話題となった。ところが、八か月遅れで放映され始めた、お金をもらって悪人を殺すという「必殺仕掛人」シリーズに人気を奪われることになる。テレビ局の視聴率争いで後発作品が様々な工夫を凝らしたことが主因であるが、「木枯らし紋次郎」が傍観を貫かず、結局最後は関わってしまうという点が、興をそいだこともその一因であったろう。

〈傍観〉は、どういう意味合いで使われる言葉であろうか。

出 原 隆 俊

まず、辞書では次のようにある。「かかずり合わずにそばで見ていること。物事のなりゆきを自分の力で変えようとせず、何もしないで見ていること。」(『大辞林』)・「かたわらで見ること。そのことに関わらないで、傍で見ていること。」(『広辞苑』)。「木枯らし紋次郎」は、まさにこれにあてはまるが、『大辞林』の記述に含まれる否定的なニュアンスについては、フォークデュオの〈ゆず〉の「傍観者」(作詞・北川悠仁)の一節が該当していよう。

横目でチラリ その傍観者 アンタに構ってるヒマないよ
「そんな事で必死になって」ってバカにしてんだろ? 「かっ
たるい」って 何もせずに誰かに期待してる 僕は行くよ
感動しながら生きて居たいのさ

しかし、辞書に登録されている内容は、実際の使用状況を適切に反映しているだろうか。青空文庫という制約のもとではあるが、「純然たる冷たい傍観者でもなく、」(牧野信一「海浜日誌」)、「また学者の常態として冷然たる傍観者の地位に立つ場合が多いた

め、「漱石「中味と形式」」、「といつて冷たい人生の傍観者になんでなれよう。」（倉田百三「愛と認識との出発」）、「傍観者のやうな態度で、彼の狂態を冷かに眺めて居た。」（平出修「癡痕」）とあるように、「冷」という言葉と結びつくことが多い。無論、それがすべてではなく、「ただ傍観者にすぎない。」（豊島与志雄「紋章」の「私」）、「単なる傍観者としての態度ではない」（三木清「西田先生のことども」）、「傷つかない傍観者の正義感」（宮本百合子「あとがき」）（『宮本百合子選集』第十巻）、「常に傍観者の態度を取つてゐた」（与謝野晶子「鏡心灯語抄」）などであり、「傍観者の種類によつて彼の態度にはいくつ種類があるらしかった。」（牧野信一「秋晴れの日」）とも言える。

二

〈傍観者〉を取り上げたのは、鷗外の「百物語」に次の一節があることによる。

・僕は生れながらの傍観者と云ふことに就いて、深く、深く考へて見た。僕には不治の病はない。僕は生れながらの傍観者である。子供に交つて遊んだ初から大人になつて社交上尊卑種々の集會に出て行くやうになつた後まで、どんなに感興の湧き立つた時も、僕はその渦巻に身を投じて、心から楽しんでゐた。僕は人生の活劇の舞台にゐたことはあつても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞台上に上らない時は、魚が水に住むやうに、傍観者が傍

観者の境に安んじてゐるのだから、僕はその時尤も其所を得てゐるのである。さう云ふ心持になつてゐて、今飾磨屋と云ふ男を見てゐるうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢ふやうな心持がして来た。傍観者が傍観者を認めたやうな心持がしてきた。

・察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍観者ではなかつたらう。それが今は慥かに傍観者になつてゐる。併しどうしてなつたのだらうか。よもや西洋で僕の師友にしてゐた学者のやうな、オルガニックな欠陥が出来たのではあるまい。さうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痕を受けてそれが癒えずにゐる為めに、傍観者になつたのではあるまいか。

・彼は依然こんな事をして、丁度作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る様に、過ぎ去つた栄華のなごりを、現在の傍観者の態度で見えてゐるのではあるまいか。

「百物語」における〈傍観者〉へのこだわりにはただならぬものがあると言えよう。二つ目の引用を裏返せば、鷗外は、「無形の創痕を受けて」ることもない「生れながらの傍観者」であつたことが一つ目の引用と同じく繰り返されるのである。引用部の箇所以前には、次のような記述もある。

あの血絲の通つてゐる、マリシヨオな、デモニックなやうにも見れば見られる目で、冷かに見てゐるのではあるまいか。こんな想像が一時浮んで消えた跡でも、僕は考へれば考へる

ほど、飾磨屋といふ男が面白い研究の対象になるやうに感じた。

・僕は障子のはづしてある柱に背を倚せ掛けて、敷居の上にしゃがんで、海苔巻の鮓を頬張りながら、外を見てゐる振をして、実は絶えず飾磨屋の様子を見てゐる。

先に述べた〈傍観〉にかかわる〈冷〉という言葉がここにも見られるのである。また、「面白い研究の対象」という言葉からは漱石の「心」での「先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。」が想起されよう。後者の引用も合わせれば、この観察の仕方は、〈傍観〉とは言えまい。自分と同様のものを発見するという、ある種の熱意がうかがわれるのではないか。鷗外自身の翻訳作品「センツアマニ」(マクシム・ゴルキイ)には「若し大きい声をしたら、この天鵝絨のやうな青い夜の空の下で、石の如き沈黙を守つて、そつと傍観してゐる何かの邪魔をすることにならうかと憚るのである。」とある。〈傍観〉とは本来はこういう様子がふさわしいだろう。「百物語」は鷗外の実体験に基づいて書かれたものであり、依田学海という実在の人物とのやり取りも実際のもので考えられ、「僕」が鷗外自身と考へても問題はないが、〈傍観者〉が〈傍観者〉の枠を超えていることが注目されよう。先の引用の傍線部での、強いられた役をとにかく果たすだけという、この自己認識の有り方は、「妄想」の次の箇所についても、ほぼ同様だと考えられる。

生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに

策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齷齪してゐる。

(略)併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。(略)その何物かが醒覚する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する学校生徒、勉強する官吏、勉強する留學生といふのが、皆その役である。

「百物語」における〈傍観者〉への関心は、鷗外を貫くものといふことが出来るのである。こうしたことを踏まえれば、「梶原品」の次のことも見落とせまい。

私は此伊達騒動を傍看してゐる綱宗を書かうと思つた。外に向つて発動する力を全く絶たれて、純客観的に傍看しなくてはならなかつた綱宗の心理状態が、私の興味を誘つたのである。

「百物語」の飾磨屋の場合と同様に、綱宗が「私」(「百物語」では「僕」と重ねられていることは明らかであろう。鷗外の〈傍観者〉への関心は一過性のものではない。鷗外自身を思わせるものとしては、「足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不平家である。」(「妄想」)なども知られているが、〈傍観者〉は、それに劣らず、じっくりと検討されてもよい。

三

ところで、「梶原品」における〈傍看〉と「純客観的」という言葉が連動していることに注目したい。次に挙げるのは長谷川天

溪の「所謂余裕派小説の価値」（明治四十一年三月）である。

自然主義者の態度は、；即ち傍観者として現実世界に立つのである。生死問題、死活問題に悩む者には、其れ等を客観に擲げ出すの余裕なく、併し自然主義者の眼には、其の問題が切迫して映ぜぬ。

自然主義と「客観」が結び付けられており、この文章に引用されている加藤咄堂「自然主義と禪」には、「純客観」という用語が用いられている。自然主義文学の代表格とみなされる田山花袋の小説「蒲団」にも次のような箇所がある。

・けれど文学者だけに、此の男は自から自分の心理を客観するだけの余裕を持つて居た。

・細君が汚がつて頻りに揺つたり何かしたが、時雄は動かうとも立たうとも為ない。さうかと云つて眠つたのではなく、赤土のやうな顔に大きな鋭い目を明いて、戸外に降り頻きる雨をぢつと見て居た。

・興奮した心の状態、奔放な情と悲哀の快感とは、極端までその力を発展して、一方痛切に嫉妬の念に駆られながら、一方冷淡に自己の状態を客観した。；熱い主観の情と冷めたい客観の批判とが絡り合せた糸のやうに固く結び着けられて、一種異様の心の状態を呈した。

・行く水の流、咲く花の凋落、此の自然の底に蟻れる抵抗すべからざる力に触れては、人間ほど儂い情ないものはない。茫然として涙は時雄の鬚面を伝つた。

「客観」ということに花袋がきわめて意識的であるのみならず、「大きい鋭い目を明いて」「ぢつと見て居た」などは、行動とは対照的に時雄の冷静な認識を際立たせているようである。「涙は時雄の鬚面を伝つた」などはきわめて滑稽であることも計算尽くのこととも言えよう。天溪の主張と重なるようでもある。しかし、嘉村磯多の「業苦」には、

しかし、さういふ風に自分といふものを強ひて客観視して見たところで、寝醒めのわるく後髪を引かれるやうな自責の念は到底消滅するものではなかつた。

とある。「客観視」してみても救われるわけではないのである。これは「蒲団」にも適用されることであろう。

それはともかく、これ以降に続々と輩出してくる作品の主人公は「生死問題、死活問題に悩む」ことから自由であるとはとうてい言えない。先に挙げた「業苦」では、先の引用の後に、

千登世との生活を血みどろになつて喘いでゐる最中、兎や斯う責任を問はれることは二重の苦しさであつて迎も遣切れなかつた。

とあるのである。岩野泡鳴の「発展」にも、

義雄が多年生活に疲れ、奔走に疲れ、放浪に疲れ、生の苦しみ——それが生命であつた——を味はつて来た今、とある。むしろ「生死問題、死活問題に悩む」ことこそがこれらの作品の読ませ所であろう。

「蒲団」では、「自分の心理」を「客観視」しようとするが、

〈傍観〉と言うことには徹しきれていないということになる。天溪の文章では、漱石が提起した余裕派小説という概念について、自然主義小説こそがそれにあたると論じているが、実態としての自然主義小説は、そうした〈余裕〉を持ち得ていないと言えよう。このような問題と関連して、豊島与志雄「紋章」の「私」を見てもみよう。

横光利一氏の「紋章」のなかには、「私」という言葉で現はされてる一人の文学者が出てくる。彼は、主要な人物たる雁金八郎と山下久内とに、共に交誼があり、いろいろのところに、出入する。そしていろいろの事物やいろいろの説明が、彼によつて述べられる。が彼は作中の事件には何の關係交渉もなくただ傍観者にすぎない。——この「私」は、誰でもよいと共にまた作者自身でもある。

かういふ「私」といふ人物を出して、傍観者たり説明者たり報告者たる地位におき、それを叙述の便法とする方法は、屢々用ひられることである。この場合、「私」は大抵、作中の人物や事件から独立した一人の人間で、その独自の存在がはつきりすればするほど、益々作品そのものとは無關係な地位になる、さういふ種類のものなのである。例へば、谷崎潤一郎氏の「春琴抄」の中で春琴の墓を訪ふ「私」がそれである。

ところで、「紋章」のなかの「私」は、さういふなまやさしいものではない。最初に述べたやうな「私」、または、雁

金が敦子にあつて我を忘れた行為をするところに立会つた「私」、山下家の茶会に出席した「私」、それらのものだけを見ると、一見、普通の「私」と異ならないもののようにであるが、実はさうでなく、その「私」が全篇の中に浸透してゐて、それは単に叙述の便法として使われた傀儡ではなく、作者そのものと同一の地位にまで高まつてゐる。

この指摘を視野に入れつつ考えれば、横光の実験的な試みと言える「紋章」の「私」のような存在として「蒲団」の竹中時雄があるわけではない。作者の意図はともかくとして、生成した作品において〈傍観者〉を貫くことはできていない。続いて、小説の描写の問題を巡つて、〈傍観者〉の問題を検討する。太宰の「春の盜賊」には、

いつたい、小説の中に、「私」と称する人物を登場させる時には、よほど慎重な心構へを必要とする。フィクションを、この国には、いつそうその傾向が強いのではないかと思はれるのであるが、どの国の人でも、昔から、それを作者の醜聞として信じ込み、上品ぶつて非難、嘲笑する悪癖がある。たしかに、これは悪癖である。私は、いまにして思い当る。

プウシュキンほどの自由奔放の詩人でさへも、その「オネエギン」を物語るにあたり、この主人公は私でない、私は別の、全くつまらぬ男だ、オネエギンは私でない。さういふことを、それはくだいほどに断つてあり、またドストエフスキイほどの、永遠の愛を追うて暮した男でさへ、その作品の主人公に

は、ラスコオリニコフとか、ドミトリイとかいう名前を与へて、決して、「私」を出さない。たまに、「私」を出すことがあつても、それは凡庸な、おつとりした齒がゆいほどに善良な傍観者として、物語の外に全然オミットされるやうな性格として叙述されて在る。

とある。この引用の終わり近くについては、「私」ではないものの漱石「彼岸過迄」の敬太郎を視野に入れることができる。

敬太郎の冒険は物語に始まつて物語に終つた。彼の知らうとする世の中は最初遠くに見えた。近頃は眼の前に見える。けれども彼は遂に其中に這入つて、何事も演じ得ない門外漢に似てゐた。

これは、「百物語」での「僕は人生の活劇の舞台にゐたことはあつても、役らしい役をしたことがない」と酷似したものであることができよう。この「門外漢」は〈傍観〉を望んだわけではないが、結局そうした位置にとどまらざるを得なかつたのである。このように、作中人物である「私」（あるいは、固有の名を与へられた視点人物）の作品展開の上での機能を〈傍観者〉という観点から解析することが可能とならう。

四

さて、〈傍観〉をめぐつて、話題を変えて、鷗外の実作品を見てみよう。まず、「雁」である。

僕は第三者に有勝な無遠慮を以て、度々背後を振り向いて見

たが、お玉の注視は頗る長く継続せられてゐた。

岡田は俯向き加減になつて、早めた足の運を緩めずに坂を降りる。僕も黙つて附いて降りる。僕の胸の中では種々の感情が戦つてゐた。此感情には自分を岡田の地位に置きたいと云ふことが根調をなしてゐる。しかし僕の意識はそれを認識することを嫌つてゐる。僕は心の内で、「なに、己がそんな卑劣な男なものか」と叫んで、それを打ち消さうとしてゐる。そして此抑制が功を奏せぬのを、僕は憤つてゐる。：僕は岡田のやうに逃げはしない。僕は逢つて話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢つて話だけはする。そして彼女を妹の如くに愛する。彼女の力になつて遣る。彼女を淤泥の中から救抜する。

ここの「第三者」は傍観者に近い立場とも言える。しかし、ここでは主人公の「地位に置きたい」というのであるから、むしろ傍観者の枠を外れても、実際に関わりたいというのである。「彼岸過迄」の敬太郎によく似ていると言えよう。

「舞姫」はどうか。

今この處を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、聲を吞みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを寫すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば

露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きに遭ひて、前後を顧みる違なく、こゝに立ちて泣くにや。我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覺えず側に倚り、「何故に泣き玉ふか。ところに繫累なき外人は、却りて力を借し易きこともあらん。」といひ掛けたるが、我ながらわが大膽なるに呆れたり。

太田豊太郎は、「覺えず側に倚り」、語りかける。最初から傍観者の立場にない。むしろ、「何故に一顧したるのみにて」と自身で不可解だと思いつつ、見知らぬ女性に関わっていくのである。しかし、実際には、その疑問を裏切るかのように、「青く清らにて物問ひたげに愁を含める目」に誘引されていることは明らかである。これは「うたかたの記」でも同様である。マリイと後にその名を知る少女と出会った箇所である。

女の子は唯言葉なく出でゆくを、満堂の百眼、一滴の涙なく見送りぬ。」

「われは珈琲代の白銅貨を、帳場の石板の上に擲げ、外套取り出でて見しに、花売の子は、ひとりさめさめと泣きてゆくを、呼べども顧みず。追付きて、『いかに、善き子、董花のしる取らせむ、』といふを聞きて、始めて仰見つ。そのおもての美しき、濃き藍いろの目には、そこひ知らぬ憂ありて、一たび顧みるときは人の腸を断たむとす。

「満堂の百眼」がまさに傍観するときに日本人画家の巨勢は、追

いかけてまで金を与えようとするのである。「舞姫」と同じように「ところに繫累なき外人」であることが、そのような振舞いを可能にさせたのであろうか。「うつろふものは、人の心の花」と思っていたマリイにとって救いとなっていたのである。

「文づかひ」では、婚約者メルヘルハイムを厭うイイダ姫を「傍観」するような立場であるが、結局は彼女の願いを聞き入れて、脱出のための仲介者の役割を果たす。

一方で、青年期以降の主人公ではどうか。「懇親会」を見てみよう。突っかかって来る新聞記者と立ち回りのけんかとなったことを記したものである。

右の耳には此脅迫の音が聞えるのである。僕は思ひ掛けない話なので、暫くあつけに取られてゐた。(中略)そして今度逢つたらを繰り返すのを聞いて、何の思索の暇もなくかう云つた。

「何故今遣らないのだ。」

「うむ。遣る。」

と叫んで立ち上がる。

これについては、太宰治の「花吹雪」に次のようにある。

かの「懇親会」なる小説は、ほとんど事実そのままと断じても大過ないかと思はれる。私は、おのれの意気地の無い日常をかへりみて、つくづく恥づかしく淋しく思つた。かなはぬまでも、やつてみたらどうだ。お前にも憎い敵が二人や三人あつた筈ではないか。しかるに、お前はいつも泣き寝入りだ。

太宰は見過ごしにしない鷗外に注目している。直接自分に関わることだから、〈傍観〉はあり得ないとしても、傍観者という規定からは距離がある。『電車窓』でも「鏡花の女」が電車の窓を開けようとしてうまくいかずにいるときに、「人の助を借るのを厭うらし」といったんは思ったものの、開けてやる。ここでも傍観を貫いていない。

こうして見てくれば、鷗外が仮託した、あるいは鷗外を思わせる存在は、少なくとも身の振舞いという点において、〈傍観者〉を貫いているわけではない。それらは単なる日常の一エピソードであって、何も〈傍観〉を云々するような問題ではないと言える。しかし、そうした側面も含めて、トータルとして鷗外は自己を〈傍観者〉と規定したいわけである。これをそのままに受け止めてよいかどうか。それは「永遠なる不平家」という規定についても同様のことが言えよう。さらに憶測をたくましくすれば、「性欲は頗る恬澹である」(『魔睡』)というようなことを作品中にしきりに取り込む(『牛タ・セクスアリス』なども)が、これもどうなのかと疑うこともあり得ようか。それはともかく、「百物語」における〈傍観者〉への執拗なまでの言及は、それだけにかえて本音については留保も必要とならう。

五

〈傍観〉あるいは〈傍観者〉ということについて、別の観点で考察していきたい。

北村透谷の初期の評論文「当世文学の潮摸様」には、次のような記述がある。

彼等何をか悲しむや将何をか苦しむや我は独り世を傍観して興するに余りあり。人間の事何ぞ必らずしも深く問む、最大主眼は今日にあり、いでや彼等に吾が大智囊より人情の道を教へん、愛恋の哲理を授ん、…公等の理想斯の如くにはあらずや。

文学極衰論争と関わる一文であり、苦しむ民衆の生活に無関心である文学者を歎棄者と批判するものである。ここでの〈傍観〉は、なすべきことを果さないという否定的な意味合いで使われている。これは文学者の主体を問うものである。一度は文学者という存在の意味に疑問を抱いて文学活動から遠ざかった二葉亭四迷は、〈傍観〉という言葉は使われていないものの、『浮雲』の作中人物である内海文三は、それが許されないはずの立場にありながら、何らの手段を講じることもできないでいる状況を取り込む。

・かう心の乱れるまでに心配するが、しかし只心配する計で、事実には少しも益が無いから、自然は己が為すべき事をさつ／＼として行つてお勢は益々深味へ陥る。其様子を視て、流石の文三も今は殆ど志を挫き、逆も我力にも及ばんと投首をした。

・此俣にしては置けん。早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠つた本心を覚まさなければならん、が、しかし誰がお勢のためにこの事に当らう?…若しお勢の眼を覚ます者が必要

なら、文三を措いて誰がならう？

《傍観》してはいられない思いを抱きつつも、無力な自分いら立つしかない。そのような者について語り手は、すでに「稍々学問あり智識ありながら、尚ほ軽躁を免がれぬ、譬へば、文三の如き者は（はれやれ、文三の如き者は？）何としたもので有らう？」と、自身が《傍観者》であるかのような言葉を吐く。

苦境にいる女性を救えない男がいるという構図（「雁」とは逆になるが）は、小林多喜二の「ロクの恋物語」にも見られる。

そのために救うことの出来ない深みに入っているものを眼の前に見ることは、とてもたまらないことなんだ。……だから、卑怯のようだが、……俺は会社をやめて、

離れることによって《傍観者》の立場から逃れようというわけである。これに対して、吉行淳之介「軽い骨」は、それを反転させたようである。

いそいと、頬をほてらせて、いかにもたのしげに、という平凡な表現はこのときの君子のために作られたかのように思えてくる。そんな表情で、彼女は売場の前に立つ。

その表情のむきだしの感じに大川はいつもいささかたじろいだ。気持の平衡を取り戻すために彼はわざと考えてみる、……貯金が蓄ったら一つ全部まき上げてやるか、と。そんな具合に、彼の気持ちは揺れ動くのだが、間もなく平らに鎮まって傍観者としての眼が彼に戻ってくる。（吉行淳之介

「軽い骨」）

悪意が収まって、《傍観者》の「眼」が「戻ってくる」とする。ここでは、《傍観者》が大雑把に問われるのではなく、その認識の機能に特化されて焦点が当てられているわけである。したがって、《傍観者》になることも、そうでないことも可能であり、鷗外の言う「生れながらの傍観者」というものとは違った存在であることになる。

さらに小林多喜二の「瀧子其他」では、娼婦に対して「君……こんな商売いやだとも思っていないのか」とか「……君等の苦しみがそのまゝ、自分の苦しみのようなんだ。」と語る男がいる。それに対して娼婦は「二、三十回も、今貴方が云ったのと同じことを聞かされて来ているんだもの」と語る。彼等には本気で娼婦を救い出す意思も力もない。その男は結局は娼婦に大酒を浴びさせる結果となる。《傍観者》のお決まりの同情が、かえって娼婦たちの心をえぐることとなるのであり、その浅薄さが露呈させられているわけである。

六

さて、《傍観者》と言えば、高等遊民を取り込む漱石の作品が思い浮かぶだろう。

君の様な暇人から見れば日本の貧乏や、僕等の墮落が気になるかも知れないが、それは此社会に用のない傍観者にして始めて口にすべき事だ。つまり自分の顔を鏡で見る余裕があるから、さうなるんだ。（それから）

これは、かつて代助が三千代との結婚を実現する手助けをした平岡が、思い通りにいかない会社勤めに関わって、代助に述べた言葉である。〈傍観者〉と「余裕」という言葉が連動しているが、それは三章で触れたところである。平岡の不如意は三千代との生活にも暗い影を投げかけており、三千代に同情した代助は「自然の昔に帰る」として、平岡から三千代を奪おうと決意する。〈傍観者〉と呼ばれていた代助が、当事者となって、事を起こすのである。その代助は生活のために〈墮落〉して職業に就くことを余儀なくされることになる。

「三四郎」でも「世の中」「それから」では、「社会」と〈傍観者〉がつながる。

三四郎は此時不図汽車で水蜜桃を呉れた男が、危ない／＼、気を付けないと危ない、と云つた事を思ひ出した。危ない／＼と云ひながら、あの男はいやに落付いて居た。つまり危ない／＼と云ひ得る程に、自分は危なくない地位に立つてゐれば、あんな男にもなれるだらう。世の中にあるて、世の中を傍観してゐる人は此所に面白味があるかもしれない。

「自分は危なくない地位に立つてゐる」て「世の中を傍観してゐる」との三四郎の捉え方は、〈傍観者〉についての典型的なものと言えよう。しかし、「是から日本も段々發展するでせう」と言つた三四郎に対して、「亡びるね」と言つた人物を三四郎は、熊本では「国賊取扱にされる」と思い、ただの〈傍観者〉ではないとうすうす感じてゐる節がある。ある意味では、その広田先生が、そ

の本質を表すようになるのが、「三四郎」の一つの軸ともいうことができよう。「それから」と同じように〈傍観者〉がそのままとどまっていけないのである。

「彼岸過迄」の敬太郎も〈傍観者〉と思われる人物と接触する。彼は又須永から彼と千代子との間柄を聞いた。さうして彼らは必竟夫婦として作られたものか、朋友として存在すべきものか、もしくは敵として睨み合ふべきものかを疑つた。其疑ひの結果は、半分の好奇と半分の好意を駆つて彼を松本に走らしめた。彼は案外にも、松本をたゞ舶来のパイプを銜へて世の中を傍観してゐる男でないと発見した。彼は松本が須永に対して何んな考で何ういう所置を取つたかを委しく聞いた。「彼」(＝敬太郎)は、作中の存在としては〈狂言回し〉と規定されることもある。「高等遊民と自称する」松本が意外にも「傍観していい」ないことを知るのだが、それは「高等遊民」が本来は〈傍観者〉という認識のもとになされるのである。そして、逆に、「自分はたゞ人間の研究者否人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様を、驚嘆の念を以て眺めてゐたい。」という自分が〈傍観者〉的存在であることを認識させられるのである。続いて「道草」を見てみよう。ここではやや特異な用い方がされている。

父から云へば、普通の人としてさへ不都合に近い愚劣な応対振を、自分の女婿に見出すのは、堪へがたい馬鹿らしさに違なかつた。前後と関係のない此場だけの光景を眺める傍観者

の眼にも健三は矢張馬鹿であつた。

ここの〈傍観者〉は作中の具体的な人物に関わつたものではなく、義理の父親に負担するわけでもない、語り手あるいは作中に想定され得る全く無関係の第三者である。ここでは、先に見たような〈客観〉という問題があろう。健三が漱石を想起させる存在であり、作者が〈客観視〉に意を払っていると読むことが可能だからである。

さらに、やや異質なものとしては次の箇所を上げることができ
る。

斯ういふ不愉快な場面の後には大抵仲裁者としての自然が二人の間に這入つて来た。二人は何時となく普通夫婦の利くやうな口を利き出した。

けれども或時の自然は全くの傍観者に過ぎなかつた。夫婦は何処迄行つても背中合せの俣で暮した。

エゴイズムが絡み合う人間を見下ろすかのような自然。漱石作品における〈自然〉という問題はかつてから論じられてきたことではあるが、ここでは、〈傍観者〉の対となるものとして〈仲裁者〉があることが注目される。「彼岸過迄」の松本は実在の人間としてそれにあたる存在である。

「明暗」についてはどのようなことが言えるだろうか。

彼の知識は豊富な代りに雑駁であつた。従つて彼は多くの問題に口を出したがつた。けれども何時迄行つても傍観者の態度を離れる事が出来なかつた。それは彼の地位が彼を余儀

なくする許でなく、彼の性質が彼を其所に抑え付けて置く所為でもあつた。彼は或頭を有つてゐた。けれども彼には手になかつた。若くは手があつても、それを使はうとしなかつた。彼は始終懐手をしてゐたがつた。一種の勉強家であると共に一種の不精者に生れ付いた彼は、遂に活字で飯を食はなければならぬ運命の所有者に過ぎなかつた。

この人物は、代助と同じように、「未だかつて月給といふものを貰つた覚えのない男」であつた。「彼岸過迄」の松本から「案外」という側面を排除した存在とも言い得よう。

「明暗」には主人公の津田夫婦が衝突した妹との関係の修復のために、「お延は仲裁者として第一に藤井の叔父を指名した。…細君（＝吉川夫人、論者注）と仲善の津田はまた充分成効の見込がそこに見えているので、熱心にそれを主張した。」と、自分の思惑に従つて、「仲裁者としての」人間を探そうとする。この点でも藤井と松本は共通するが、〈仲裁者〉どころか、お節介ものとも言える吉川夫人の介入を求めるのである。それと対比すれば、〈傍観者〉としての〈自然〉はその冷徹な立場を貫くかのように見えよう。

漱石の作品における〈傍観者〉をめぐることは、鵜外作品と対比した場合に、そう目される人物がその立場に固着することが許されないという傾向や、〈自然〉というものが人間を相対化する役割を確認できるであろう。また、〈傍観〉という言葉が使用されていなくとも、「心」のような場合もある。

先生はまた「私のやうなものが世の中へ出て、口を利いては済まない」と答へるぎりで、取り合わなかつた。私にはその答へが謙遜過ぎてかえつて世間を冷評するようにも聞こへた。「世間を冷評する」は〈傍観者〉の言とも見えようが、「口を利いては済まない」という思いが身を律しているとも言えよう。

七

最後に、〈傍観者〉という言葉を使うことの多い文学者の作品を検討してみよう。

何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に対して抱くやうな事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感じたからに外ならない。

芥川の「鼻」である。ここで特徴的であるのは、他者に対して〈傍観者〉であるということとを認識するということであろう。それが、次の「路上」ではどうなるか。

その雨の中を歩いて行く俊助の心は沈んでゐた。：彼等が代表する世間なるものも思ひ出した。彼の眼に映じた一般世間は、実行に終始するのが特色だつた。或は実行するのに先立つて、信じてかゝるのが特色だつた。が、彼は持つて生れた性格と今日まで受けた教育とに煩はされて、とうの昔に大切な信ずると云ふ機能を失つてゐた。まして実行する勇氣は、容易に湧いては来なかつた。従つて彼は世間に伍して、目ま

ぐるしい生活の渦の中へ、思ひ切つて飛びこむ事が出来なかつた。袖手をして傍観す——それ以上に出る事が出来なかつた。

前半は「それから」の代助を思わせ、後半部は「心」の先生のよくな過去があるわけではないが、それに類する趣がある。

先に「春の盜賊」で触れた、太宰は〈傍観者〉を多用する作家である。一例として「斜陽」を見よう。

困つた女。しかし、この問題で一ばん苦しんでゐるのは私なのです。この問題に就いて、何も、ちつとも苦しんでゐない傍観者が、帆を醜くだらりと休ませながら、この問題を批判するのは、ナンセンスです。私を、いい加減に何々思想なんて言つてもらひたくないんです。私は無思想です。私は思想や哲学なんでもので行動した事は、いちどだつてないんです。必死で戦後を生きようとする女性の〈傍観者〉批判である。「乞食学生」にも「傍観者は、なんとでも言へるさ。：」とあるように、太宰作品においては、もがく渦中の当事者が〈傍観者〉が反発するという構図が見られる。

藤村の「新生」には、次のようにある。

・多くの場合に岸本は女性に冷淡であつた。彼が一箇の傍観者として種々な誘惑に対つて来たといふのも、それは無理に自分を制へようとしたからでもなく、むしろ女性を軽蔑するやうな彼の性分から来て居た。

・実にこの世の中は無事であるけれども、もと／＼遠い旅に

まで逃れて行ったほどのものが奈何してあの震へる小鳥のやうな節子を傍観し得られたらう。彼は生きた屍にも等しい人を抱いてしまった。

・自己の罪過の責を負はうと決意するやうに成つたのも、すべては皆彼女の破滅を傍観し得られなかつたところから起きて来たことだと書いた。

〈傍観〉に関わるこのような記述を見る時、それではなぜ岸本が姪と関係したのかという素朴な疑問が払拭できない。当たり前の議論をすれば、事を起こした当事者が〈傍観者〉であるなら、責任回避に過ぎないのではないか。ここにはそのような岸本を仕立てる藤村が透けて見えるようにも思われる。

最後に、現代作家で〈傍観〉のイメージが多用されるのは、大江健三郎の初期作品である。

・黄色の歯茎を剥いた中年の警官はいった。それを他の連中は黙って見ていたんだらう？

僕は、と噛みしめた歯の間から呻くように声を囁らせて教員がいった。平静な気持ちでそれを見ていたわけじゃない。

〔人間の羊〕

・娼婦はかれと弟を等分にながめて黙っていた。そして彼女はかれら兄弟のまえで、外部の他人として殆ど無関心な態度をたもっていた。(戦いの今日)

「…おれたちは汚くてちっぽけな日本人を有楽町の臭いドブ河へ投げ込んで溺死させた。その時、日本人の群衆はおれた

ちををリンチするかわりに、黙って見ていたぜ」(見る前に跳べ)

これらは、いずれもアメリカ兵とのかかわりを素材としたものである。最後の例は、森村誠一の「人間の証明」にも見られる。三島由紀夫の「金閣寺」では、これらと逆に、アメリカ兵によって日本人娼婦の腹を踏ませられる僧侶の見習がいる。この場合は当事者を余儀なくされるのだが、自分がそうなっていなければ、〈傍観者〉として立ち会っていたらう。作者の枠を超えて、時代のシチュエーションが共通する光景を取り込ませたとさえ言う。戦後に関わることでいえば、「私は貝になりたい」を想起させる庄野潤三の「相客」の、戦犯として連行されることになる兄に対して、「兄はスポーツマンである長兄よりも私を味方に思っていて、私はおだてることよりも、傍観的であるか、無理解であることの方が多かった」とあることの〈傍観〉したことの痛みも思い浮かべられる。

以上、素描にとどまった部分もあるが、〈傍観者〉という視点を導入することによって、文学史の一角への試行としたい。

※引用は原則として各人の全集による。

(いずはら・たかとし 本学大学院教授)